

平成二十八年<sup>度</sup>

中世文学会春季大会

シンポジウム・研究発表要旨

## 「文学の生まれる（ところ）」趣旨

司会 法政大学 山中 玲子

中世文学の研究は、他の学問領域とも影響し合いながら、日々独自に進展しています。我々は、いわゆるカルチュラルスタディーズの手法を知り、また、精緻な実証研究の積み重ねによって、思いもよらなかった事実が明らかになる驚きや喜びも経験しました。大寺院にどのような資料がどのような集められていったのか、中世の「知的ネットワーク」がどのように広がっていたのか、といった新しい視点による研究も大いに進みました。

こうした研究の進展から多くの学恩を得た今、そこにとどまらず、ではこの新しい知見を踏まえ文学研究はどうあるべきか、もう一度問い直していく必要があるのではないかと考え、今回のシンポジウムを企画した次第です。

たとえば、宗教的言説と文学的言説はどこで分かれるのか。神仏への信仰や運命の不思議さに反応する気持ちなど、人間の根源的な心の働きは、何を表現の拠り所として文学になるのか。タイトルに掲げた（ところ）とは、「所（場、空間、環境）」であり、「時（機会、契機、場面、瞬間）」でもあり、文学の生まれる「機微」と言い換えてもよいものと考えています。その様な意味での「文学が生まれる（ところ）」を問うことは、ほとんど「文学とは何か」を考えるのと等しく、数時間のシンポジウムには大きすぎるテーマかもしれません。しかし、中世文学の研究が「生きること」「そのものと深く結びつく豊かで楽しい作業であることを再確認し、さらに若い世代に伝えるためにも、怖いものしらずで取り組んでみたいと思います。

ごく緩やかな枠組みとして、作品研究・人物研究・文体研究それぞれの分野からパネリストをお願いたしましたところ、茫漠とした趣旨をよく汲んでくださり、最先端の研究成果を踏まえ、かつ、多くのジャンルに関わる問題点を掲げてくださいました。フロアと共に活発な議論ができることを期待しています。

## 説話が機能を超えるところ

尚綱大学 森 正人

日本古典文学研究が「説話」として扱ってきたものは、「こと（事、言、語）」として把握され提示されるものであつて、人間あるいはそれ相当の存在の行為とその結果についてまとまりを与え言語を用いて表現したものと規定しうる。ただし、説話はそれ自体では存立しえず、場において、文脈のなかではじめて機能する。その機能は、譬喩、因縁（来歴）、例証の三種に収まる。たとえば、真福田丸の長者の娘への懸想とこれを機縁とする出家の説話が行基伝あるいは智光伝の一部となり、文殊菩薩の靈驗譚となり、歌語「芹摘み」の起源譚となる。同じ説話が所を変えて伝播し、時を超えて伝承される性質を有するのは、説話のこのような機能性の高さゆえということにならう。

しかし、それだけでよいのであろうか。たとえば事実性、珍奇性、滑稽性、悲傷性などの説話の属性とは別の、まとまりを与えられたところの「こと」それ自体の価値が、説話の機能を超えて私たち現代の読者の前にも姿を現す場があり、時がある。説話のそこを扱わなければならないのではない。たとえば、浦島説話、瘤取り説話は人が一度聞いたら忘れることはないからであろう、千年あるいは数百年を超えて基本的な構成を変えることなく伝えられてきた。人が一度聞いたら忘れないということは、その説話が人間に関する普遍的な問題を含んでいるからであろう。私たちはこのことに正対し、実直に取り扱うことを避けてはならない。中世の人々の心性と表現を理解し、私たちが文学を研究することの意義を手放さないために、あるいは回復するために。

発表に当たっては、異境、夢、神仏、幽霊、異人（妖怪）など、知らぬ世界、見慣れぬ存在の登場する説話の類を取り上げ、またできるだけ他のジャンルにも及んで、この問題に向き合いたい。

## 明恵をめぐる夢と奇瑞と信仰の磁場

成蹊大学 平野 多恵

鎌倉時代を生きた僧・明恵の人生は、夢と奇瑞に彩られていた。明恵は生涯を通じて自らの夢を記録した。明恵の天竺行を制止した春日明神の託宣とそれに関わる奇瑞についても、明恵自身が書きとどめている。さらに、直弟子による明恵の談話や講義録の聞き書きなどの記録、伝記資料にも、明恵の夢や奇瑞が多く見える。春日明神の託宣については、後代の絵巻や説話、謡曲の素材ともなった。つまり、明恵の夢や奇瑞には、明恵自身・弟子たち・後代の人々という三方向からの記録が存在するわけである。

本発表では、明恵の夢と奇瑞のうち、異なる角度からの記録が存在するものを取り上げて、それらがどのように異なり、どのような観点から書かれたかを明らかにする。明恵の体験した一つの主題がどのように書かれ、語られ、編集され、変容し、いかなる影響を与えたのか。その変奏のすがたを探り、磁場の広がりを明らかにすることによって、文学のありようを考える手がかりとしたい。

具体的には、明恵の夢のいくつかと春日明神の託宣をめぐる奇瑞を取り上げる。明恵の夢については、明恵自身が書きとめた「夢記」、弟子による明恵の談話聞き書き『喜海四十八歳之記』『梅尾御物語』『上人之事』、弟子による伝記『高山寺明恵上人行状』、後代の伝記『梅尾明恵上人伝記』において共通するものを取り上げて比較分析する。春日明神の託宣については、明恵自身が書いた『十無尽院舍利講式』『秘密勸進帳』、高弟喜海による託宣の記録である『明恵上人神現伝記』や根本伝記たる『高山寺明恵上人行状』、後代の伝記である『梅尾明恵上人伝記』、春日明神の託宣説話を載せる『春日権現験記絵』『沙石集』『古今著聞集』『真言伝』『元亨釈書』『金玉要集』、この託宣譚に材をとった謡曲『春日龍神』などを検討する予定である。

## 散文の生まれる場所―〈中世〉という時代と自照性

国際日本文化研究センター 荒木 浩

今日の中世文学研究では、対象とする時代の拡がりについて、ゆるやかな共通認識がなされている。たとえばシンポジウム「中世文学の範囲」(『中世文学』三五、一九九〇年)でも、「中世」という時代の上限・下限を問題にするのではなく(島津忠夫)、討議はその内実に集中して展開する。

だがかつて戦後の転変の中で、世界文学的構想のもとに日本文学史が再考され、日本に古代はなく中世から始まるという主張(岡崎義恵)や、逆に中世を立てず、古代と近世を接続させる説(齋藤清衛)など、時代区分の枠取りを根底から揺るがす議論も展開した(一九五〇年)。その当否はともかく、広い意味での対外観的視点からなされる日本文学史再構築の試みは、〈中世〉という、そもそも相対的な時代の諸相を普遍的に捉えようとするときに示唆的である。

如上の視座に触発されつつ、本発表では『徒然草』に帰着する散文の成立と〈自照性〉の文学史的意義を考えたい。この問題については、詩や和歌に遡源する言志論とその中世的展開、和文の確立、日記や随筆的テキストの系譜等々、私に分析を継続してきた(拙編『中世の随筆』、近刊予定の拙著『徒然草への途(仮題)』他参照)。発表では、その包括的理解をめざして既成の軸域を超え、他者の言説を筆録する古代説話集や経文抄録の『往生要集』の編纂など、自己言及とは一見対極的な著述行為に潜在する自照性の在処を、併せ考察する。そこには、信仰に根ざした対外観と夢の役割をめぐる一体的な関係が見出され、『更級日記』や明恵『夢記』のような言説形成との断続も照射されるだろう。

その時、「心」の所在を問いつつ言述される『方丈記』や『徒然草』が、夢や夢記とはおよそ無縁の場所 で 成 立 して いる こと の 特 異 性 や 意 味 も、 あ ら た に 浮 か び 上 が る。 こ う し た 言 説 空 間 の 様 相 を 追 っ て 散 文 の 生 ま れ る 場 所 に つ い て 議 論 を 重 ね、 中 世 と い う 時 空 観 の 再 構 築 に さ さ や か な 寄 与 が あ れ ば 幸 い である。

## 『方丈記』冒頭対句考―死から生へ―

熊本大学大学院生 伊崎 久美

冒頭の「カツキエーカツムスヒテ」の部分は、〈朝ニ死ニータニ生ルヽ〉に対応し、出生に先んじて死亡を記す〈死―生〉の常軌を逸した対句であり、生死逆順の表現に疑問が出されている。井手至氏は『万葉集』で「死・生」の対偶は〈死―生〉の順に配列され、「いきしに」の固有の上代語は存在せず、漢語「生死」の訓読語であるとす。この上代の対偶の名残りは、

ホトセハシトイヘトモヨルフスユカアリ

ヒルキル座アリ

の〈ヨル―ヒル〉でも見られ、これは夜中心に夕方から一日が始まるという日本固有の時間認識である。近藤信義氏や多田一臣氏によれば、この時間帯は更に、呪的な靈威の濃く現われる夕方と朝、神霊が積極的に動く夜から暁までの時間に区分されるとする。

〈朝ニ死ニータニ生ルヽ〉の対句は、頭と幽が入りする固有の死生観に裏付けられ、私見では〈死―生〉の頭幽連続の生命観は、『古事記』のイザナギとイザナミの黄泉国での「一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ」が根拠と考える。

古注の『流水抄』は、唯識や止観の影響を指摘する。唯識によれば、アーラヤ識は「住居」である。人と栖の主題が、避板法により「人ノスマヒ」「カリノヤトリ」「アルシ・露―スミカ・花」の語句で繰り返されるのは、アーラヤ識とそこに住む薰習種子との関係を提示する。突如〈死―生〉の対義概念は消え去り、〈アサ日〉の朝顔の花と〈夕〉の露の、共に消滅を示す隔句対は、煩惱が消え種子のよりどころである限りのアーラヤ識も消滅し、固有の死生観を持つ人と栖の輪廻の解脱を暗示する。

結論として、〈カツキエーカツムスヒテ〉の生死逆順の対句は、頭幽連続の生命観を表わし、究極的には唯識観によるそこからの悟りを示唆するが、〈朝―夕〉〈夜〉〈アカ月〉等の固有の時間認識においては、重大な自身の思想遍歴の局面で必ず同時に配置されている。

## 流布本『保元物語』『平治物語』における乱の認識と物語の改変

早稲田大学助手 滝澤 みか

『保元物語』『平治物語』の諸本の中、改作の最終段階に位置する「流布本」（永積分類保元九類本・平治十一類本）は、近年、一五六〇年前後までに存在・享受されていたことが明らかに、その成立期が一四四六年〜一五六〇年前後という室町末・戦国期に当たることから、社会の動乱期における軍記物語の在り方が窺える重要な本と言える。

流布本両物語は影響し合い成立しているが、異なる特性の作品となっている。発表者は、流布本『保元物語』は〈秩序〉を価値基準とし「世を乱してはならない」ということを説き、流布本『平治物語』は〈武士の振舞い方〉を価値基準とし「臣下がどう振舞うべきか」を説いていると分析する（『国語国文 85 - 5』二〇一六・五掲載予定）。両物語は影響関係を持ちつつ、なぜこのように別の価値観を説く物語へと終着したのだろうか。それは、流布本から見たこれらの作品や乱の本質が異なるためと考えられる。本発表では流布本が各物語・乱をどう捉えていたのか、十五〜十六世紀当時の乱の認識と併せて検討し、物語の改変への影響について分析する。

合戦場面に着目すると、先出諸本から削除・改変している要素が両物語で異なるが、それは各物語の戦乱に対する意識の違いの表れと考えられる。流布本『保元物語』は戦いを抑制する傾向にあるが、保元の乱は常に歴史書の中で〈動乱の始まり〉と位置付けられ、流布本も同様の認識を持つ。そうしたイメージが強い乱を主材とすることこそ、戦乱を楽しむ作品になることを避けたのではないか。また平治の乱は、次第に武士政権の樹立の契機として、更には後の源氏の〈統治の始まり〉も意識した歴史認識の中で捉えられていく。そうした認識が流布本『平治物語』に見える、武士の模範を提示していく姿勢に繋がっていると考えられる。

流布本はそれぞれの乱を単なる物語の題材と見ているわけではなく、先出諸本とは全く異なる性質の改変を行っている。

## 羅文訓読と「翻訳」の誕生——一五九一年バレット写本福音書抄を通して

上智大学客員研究員 シュウエマー・パトリック

本発表では、キリスト教説話の口語日本語訳を集めたバレット写本を取り上げ、その文面に垣間見られる共通「語」としてのラテン語と、共通「文」としての漢文との衝突・共存のあり方を考察する。当時ヨーロッパでは、高度なやり取りは口頭でも表音文字を介してでも、ラテン語という共通「語」によって行われた。一方、東アジアでは中国諸語を含め、どの言語の話者も漢文という共通「文」、つまり無国籍の表語文字で文章を書き、「訓読」という読解法で、それぞれの口語として読むのが主流であった。この言説制度がいかに根強く、いかに独自の可能性を孕んでいるかは、近年の研究によって究明されている。林羅山が不干斎ハビアンと宗論を行なったのが羅山による虚構で、実際には寛永時代以降、リッチの中国語を訓読して初めてキリスト教の内容を知ったのであった。(パラモア、二〇一三年) 明治時代においてさえ、ヨーロッパ諸語の文献には訓点を付けて、訓読するのが普通であった。(森岡健二、一九九九年) 天正時代のバレット写本でも、例えば天草版『ラテン文典』の名詞曲用表のままに、ラテン語の奪格を「より」と訳すなど、「羅文訓読」と言うべき方法が確認できる。また、漢文として書き替えれば整然とした五言七言の対句になるという調子でラテン語が和訳されている例もある。あるいは、それまでは仏教書をサンスクリット語から漢文に書き替えることを意味してきた「翻訳」という言葉はイエズス会の『羅葡日辞書』で初めて現代的な意味で使われるのだが、まさにこの「翻訳」という方法で、幸若舞などの語り物芸能とよく似た文体で意識する例もある。ただしこの場合、ラテン語の慣用表現を誤解したケースもある。この一作品を中心に、日本中世文学においてラテン語と漢文のグローバル化が始まっていく過程を追究する。



## 『頭注密勘』考―頭昭注と『和歌色葉』との関わりをめぐる―

千代田女学園中学校高等学校非常勤講師 新田 奈穂子

『頭注密勘』は頭昭の「古今秘注抄」に定家が注を加えた歌学書である。以下、本書の頭昭注を頭注、定家注を密勘と呼ぶ。

かつて稿者は『中世文学』第五号の拙稿において、頭注の成立は『古今集注』の成立より後であり、早くとも建仁元年（一一〇一）、おそらく建仁三年（一一〇三）成立の千五百番歌合以降であろうと推測した。では、なぜこの時期に、頭昭は新たに古今集注釈を執筆したのでろうか。

建久年間に成立した上覚の『和歌色葉』は、奥書に見られるように頭昭が閲覧している。そこで本発表では、『和歌色葉』が頭注執筆のきっかけになったのではないかと予想し、『和歌色葉』下巻の古今集注釈と頭注を比較検討していきたい。

『和歌色葉』は、日本歌学大系の解題の指摘のとおり『奥義抄』『和歌初学抄』に負う所が多く、また黒田彰子氏の「和歌注釈をめぐる―和歌童蒙抄と和歌色葉―」（『中世和歌論攷―和歌と説話と―』の指摘の通り、『奥義抄』に加え『童蒙抄』の影響を強く受けている。下巻の古今集注釈六十七首の場合、『奥義抄』とほぼ同じか要約、その注釈の内容に説明を加えたものが四十九首と、七割以上が『奥義抄』に拠る。

その一方、内容が『奥義抄』と異なるものがあり、『童蒙抄』のほか、『袖中抄』・頭昭『古今集注』といった頭昭の注釈の影響などが見られる。このうち頭昭説の引用がある注の中に『奥義抄』説批判が見られるが、それは頭昭説の影響によると推測できる。

次に、頭注と『和歌色葉』を比較検討した結果、頭注に五例、『和歌色葉』説批判が見られた。

以上をふまえ、建仁元年以降、頭昭が、新たな古今集注釈である、頭注を執筆した理由について、『和歌色葉』を閲覧した頭昭が、頭昭自身の説の影響による上覚の『奥義抄』説批判と接して、改めて『奥義抄』説を見直す必要を感じ、加えて『和歌色葉』の記述には誤りがあると考え、それを訂正しようとしたためではないか、と推測した。

## 宗尊親王と『源氏物語』

和洋女子大学 木村 尚志

中世において『万葉集』や『源氏物語』の研究は、和歌の創作と深く結びついていた。宗尊親王は源親行・飛鳥井雅有といった源氏学の泰斗と親交があった。その本歌（本説）取りによる源氏撰取の中には、物語の文脈にぴったりと寄り添いつつもそれを「誰かくけん」というように突き放して見るものと、物語の文脈を状況に改変を加えることで別の文脈にずらすもの等がある。この両者は『源氏物語』を離れようとはしているが、その文脈を抜きに状況を理解するのは難しい。しかし、新古今時代の本歌（本説）取りの概念では捉えられない部分がある。

それは主体を曖昧化させることにより、個別の物語の文脈を普遍的な人間の境涯の表現へとずらす「人称の曖昧化」とでも呼ぶべき特質である。人を特定させる具体性よりも、人間の境涯に重きを置く表現のあり方は、複式夢幻能の前シテにも喩えられよう。宗尊親王の源氏撰取は文永三年の廢將軍の悲劇以降に急増している。この事実からは、我が身の境涯を表現するために『源氏物語』の世界に親しんだ、という推測が導かれる。

例えば浮舟巻を取った「舟泊めて誰ながめけん橘の小島の月の有明の空」、明石巻を取った「明石潟年経し浦の秋風に苦屋も荒れて月や澄むらん」という歌の主体は、前者は浮舟、匂宮、浮舟の女房、後者は光源氏、明石の君等であるが一人に特定することはできず、具体的な言葉は『源氏物語』そのままでありながら、その言葉が表す心は普遍的な人間の境涯のあり方にずれている。その表現のあり方は、連歌において付句に対し『源氏物語』の世界への展開を促そうとする前句、乃至は前句の『源氏物語』の世界から離れようとする付句等に似ており、いわゆる和歌の本歌（本説）取りの概念とは一致しない部分がある。そうした広義の本歌（本説）取りのあり方とその背景について、連歌や能の表現のあり方も視野に入れつつ考察するのが本発表の目的である。

## 真観奥書本古今集の面影

早稲田大学 兼築 信行

天理大学附属天理図書館に所蔵される、宝治二年二月九日付の真観（藤原光俊）奥書をもつ古今集の鎌倉中期古写本（以下「天理本」と略称）は、川上新一郎氏により詳細な書誌報告がなされている（『斯道文庫論集』四九）。同奥書によれば、真観は、貞永元年八月二〇日「或書生」に書写させた貞応元年十一月二〇日定家奥書本に、貞応二年七月二二日定家奥書本を、「文字仕」にいたるまで校合したという。しかし天理本に、この校合の形跡は見あたらない。ところが、美保神社蔵手鑑等に見える伝二条為世筆の四半切は、書写形態が天理本とほぼ同一であるとともに、仮名の字母、あるいは字体にいたる異同が傍記されている。同様の資料には伝二条為道筆の切があり、これらについて、先に資料紹介を行った（『国文学研究』一七八）。

天理本には、歌頭に墨の圈点、歌句に朱の庵点が施されており、これらも伝為世・伝為道筆切に見出すことができる。このうち庵点は、伝二条為氏筆因幡切に付されているそれと酷似し、調査の結果、ほぼ一致することが判明した。

天理本は真観奥書本の転写本と考えられるが、その際に校合は割愛されたものであろう。いっぽう、真観のこの営為を考えるためには、寛元く宝治期における定家筆三代集の書写・校合活動を合わせ見る必要がある。真観は寛元三年六月九日に拾遺集（天福元年八月奥書本）を透写した。寛元四年二月二八日には後撰集（天福二年三月二日奥書本）を透写し、宝治元年一〇月二日に、別の定家筆本（貞応元年七月奥書本）と校合を行っている。寛元四年一二月の春日若宮社歌合（所謂反御子左家の旗揚げ）に相前後するこの時期の真観の意識を探るうえで、三代集の書写に窺がわれるこうした態度は注目される。それは、定家を過剰に「骨肉化」しようとする行為と言えるかもしれない。天理本ならびに伝為世・伝為道筆切から真観の営為の面影を再現し、その意味を考えたい。